

# ヘロドトスにおける僭主のスペクタクル

Tyrants' Spectacles in Herodotus

デボラ・ボーデカー（ブラウン大学）

Deborah Boedeker (Brown University)

師尾 晶子訳

本稿は 2013 年 3 月 23 日に千葉商科大学でおこなわれた講演の翻訳である。この講演では、舞台の鑑賞という比喻（めがね）を通してテュランノス（僭主 *tyrannos*）、デスポテス（独裁者 *despotes*）、バシレウス（王 *basileus*）と称された者たちの本質をヘロドトスがいかに鋭く切り取ったかについて分析している。「見る・眺める *theomai*」という動詞がどのように効果的に用いられているかを『歴史』の引用をとおしてつぶさに分析し、「めがね、見世物、光景、スペクタクル」を意味する英語の *spectacle* およびその同義語を駆使して、楽しくも重厚な論考とすることに成功している。

英語版では 600 頁あまりからなるヘロドトスの『歴史』は画期的な作品と言えるが、ヨーロッパ世界における最古の壮大な散文テキストであり、西洋における最古の長大な歴史書である。実在の人間の歴史を扱っており、ホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』などもっばら神話上の物語を扱ったものとは対照的なものといえる。『歴史』はすぐれて多様性のある作品で、その主題は伝説、伝聞からプロパガンダ、事実までおよんでいる。ヘロドトスは自らこのことを十分に承知しており、主として口承の情報にもとづいた性格の異なる資料から明快で有意な物語を編み出すよう努めていた。ある意味、彼の話法は詩的であり、明快な語り口と見解からのみ意味を伝えるのではなく、イメージや連想から意味を紡ぎ出しているのである。本報告は、ヘロドトスの芸術的手腕について考察する。すなわち、ヘロドトスが独裁者あるいは僭主とよんでいる人々のあり方を特徴づけるために、その政治的歴史的意味を詩的に構築した手法を考察したいと思う。

周知のとおり、『歴史』の主題は前 500 年の少し後からはじまった一連の紛争にある。紛争は、最終的には数十の小さなギリシア都市国家が強大なペルシア帝国に対して戦いを挑むにいたった。この広大な王国には小アジアの西岸（今日のトルコ）に位置する多数のギリシア諸市も含まれていた。一般に「ペルシア戦争」とよばれる戦争は、この地域のいくつかのギリシア諸市がペルシアの支配から自由になろうと企てたことから始まった。スパルタやアテナイを代表とするギリシア本土の都市のいくつかも戦争にかかわり、彼らを従属させようとするペルシア王ダレイオス、のちには彼の息子のクセルクセスに抵抗しようと団結した。

ヘロドトスはしかしながら、前 499 年のイオニア諸市の反乱から書きはじめるのではなく、少なくともその半世紀前からのペルシア帝国の発展を長々と叙述することに着手した。彼は、ギリシア人をひきつけた東方の王、まずはリュ

ディア王、ついでペルシア王を取り上げる。重要な関連事件と登場人物は以下のとおりである。

[資料1 年表 すべての年代は紀元前、また多くの年代はおおよそのもの]

- 716? ギュゲスがリュディア王となる
- 560-46 ギュゲスの子孫であるクロイソスがリュディアを支配し、小アジアのギリシア諸市を征服する
- 559-30 キュロスがペルシア王となる
- 546 キュロスがクロイソスを破り、彼の王国を征服する
- 530-22 キュロスの息子カンビュセスがペルシアを支配する
- 561-27 アテナイ人ペイシストラトスが三回にわたり僭主となる
- 522 ダレイオスがクーデタによってペルシア王となる
- 513 ダレイオスがスキュティアに侵攻する
- 513 キュレネの支配者フェレティメが敵対したバルカ人を処刑する
- 499 アテナイの援助を得てイオニア人がペルシアの支配に対して反乱する
- 490 ペルシア軍のアテナイへの遠征、マラトンの戦いでの敗北
- 486-65 クセルクセスがダレイオスを継ぎペルシア王となる
- 480-79 ギリシア本土におけるペルシア戦争（テルモピュライの戦い、サラミスの海戦など）

ヘロドトスは東方の君主やその他の支配者をしばしば見世物と結びつけている。彼らが第三者のためにお膳立てするのであれ、自らを眺めるために舞台を整えるのであれ、あるいは第三者が彼らに見せるために用意するのであれ、ともかく大がかりな見物(みもの)が用意された。これらの物語の一節には θεάομαι (見る) という動詞の変化形がよく用いられているが、この言葉は英語の theater と関係がある。ヘロドトスがどのように「スペクタクル=見世物」という主題を用いているのかについて以下考察していこうと思う。ヘロドトスは専制支配の重要な側面を、修辭的というより詩的な論法をもって伝えるために、このスペクタクル=見世物という主題を使っている。そしてそれは、彼が言うところのテュランノス（僭主 *tyrannos*）、デスポテス（独裁者 *despotes*）、あるいはとりわけペルシアの支配者を示す用語であるバシレウス（王 *basileus*）によって実践された。

ヘロドトスは単一の人物に集約される権力について問題を感じていた。これについてはキャロリン・ドゥウォールドが簡潔に述べているとおりである<sup>1</sup>。しかしながら、派生語である英語の ‘tyrant’ や ‘despot’ とは異なり、ギリシア語の *tyrannos* および *despotes* は必ずしも否定的な意味をもつ用語ではなかったこと

<sup>1</sup> C. J. Dewald “Form and Content: The Question of Tyranny in Herodotus,” in K. A. Morgan ed., *Popular Tyranny: Sovereignty and its Discontents in Ancient Greece*. Austin, Texas, 2003, 25-58.

を指摘しなくてはならない。*despotes* の基本的な意味は「所有者」ないし「主人」であり、*tyrannos* は「統治者」ないし「君主」を意味する。ヘロドトスは、これらの用語で表現した者たちのうち何人かについては賞賛の言葉すら述べている。たとえばアルカイック期アテナイの少数者支配を転覆したアテナイ人貴族のペイシストラトスは、自らをテュランノス *tyrannos* と称して僭主政をしいたが、正しい支配をおこない、アテナイの法を遵守したことで賞賛されているのである（『歴史』1巻59章）。

ペイシストラトスは前561年から前527年に死去するまでの間に、じつに一度ならず三度アテナイの僭主となった。二度失脚させられたが、再度権力を奪取することに成功した。ヘロドトスによれば、最初の権力奪取は目くらましの事件を演出することで実現した。資料2のとおりである。

〔資料2 ペイシストラトスがアテナイの僭主となる（『歴史』1巻59章3-5節）〕

アテナイで海岸党と平原党の二派が・・・相争っていたとき、ペイシストラトスは独裁政治(*tyrannis*)をめざし第三党を起こした。彼は同志を集めて自ら高地党の党首と称し、次のような計略をめぐらした。自分で自分の体と驃馬を傷つけておき、アゴラに馬車を乗り入れて、敵方が田舎へ行こうとした自分を襲って殺そうとしたが、その手を逃れてきたところだと言った。そして、・・・護衛をつけてほしいと市民に訴えたのである。アテナイ人はまんまとペイシストラトスの術中に陥って、市民の中から選抜して護衛をつけることを認めた。・・・これらの者たちがペイシストラトスとともに蜂起して、アクロポリスを占拠したのである（松平千秋訳『歴史』、一部改、以下同<sup>2</sup>、また下線は原著者による、以下同）。

ペイシストラトスはさらに見事な見せ場<sup>スペクタクル</sup>をもって二度目の権力奪取を果たした。第一回目の僭主の地位からの失脚と亡命をへて、前556年にアテナイにもどると、彼と彼の仲間、資料3に示されるように、華々しいポリスへの帰還を計画した。

〔資料3 ペイシストラトスとフェエ（『歴史』1巻60章）〕

ここにパイアニア区の住人で、名をフェエといい、身の丈は4ペキユスにわずか3ダクテュロス足らぬほど（180センチ弱）の大柄で、そのほかの点でも容色すぐれた女がいた。メガクレスの一党は、この女に完全武装をさせて車に乗せ、最も効果的なポーズをとらせて町へ乗り込ませたのである。これに先導の触れ役が先発して、町へ到着するや命ぜられたとおり、次のように

<sup>2</sup> 本文中に引用されるヘロドトス『歴史』の日本語訳は、おおむねヘロドトス・松平千秋訳『歴史』上・中・下、岩波文庫、1972年にしたがった。ただし、適宜原文と著者の英訳に照らして改訳してある。

触れた。「アテナイの町の衆、快くペイシストラトスをお迎えなされ。畏くもアテナ女神御自らが世の誰よりもこのお方を大切に思われ、ご自身のお住まいなされるアクロポリスへ、お連れ戻しになるところですぞ。」触れ役たちがこのように街中を触れてまわると、アテナ様がペイシストラトスをお連れ戻しになったという噂がたちまち田舎にまで広がり、町のものはその女を真の女神と信じて、実は神ならぬただの人間であるその女に祈りを捧げ、かくてペイシストラトスを迎え入れたのであった。

ヘロドトスは、普段はきわめて知的な市民であるアテナイ人がこのような馬鹿げたまやかしに騙されたことに立ち止まって驚嘆している。ロバート・コナーは、ペイシストラトスは守護神アテナが市民の守護と統治に深く関わっているという一般的な考え方を利用したのであり、それをアテナイの人々が受け入れたのではないかと指摘している<sup>3</sup>。言い換えるならば、この見世物スペクタクルは、まやかしというよりもむしろアテナイ人の信仰のイメージを相互に理解可能なやり方で利用したということであったのかもしれない。この事件が実際に起こったとするならば、コナーの指摘は歴史的には適切なのかもしれない。しかしながらヘロドトスがここで示したかったのは、単なる見かけ倒しの見世物がアテナイの政治秩序を変える装置となったということなのである。

ペイシストラトスは一般人向けに「リアリティ」を操作することで大成功をおさめた。今日でもよく見られる政治手法である。彼は、最初の政変において、現実には暴徒に襲われていなかったし、二回目の政変時、女神アテナによってアテナイに戻されたのでもない。しかしながら、ヘロドトスの説明によれば、彼が作り出した見世物スペクタクルによって、ペイシストラトスは多くのアテナイ人にこれらの出来事が起こったことを自分たちの目で確かめさせたのである。

百聞は一見にしかず。このことは自分自身が演じた見世物のために権力を失ったより古い時代のある支配者の事例によって端的に示されている。リュディアのテュランノス *tyrannos* であったカンダウレスは自身の妻である后に異常なほど恋こがれており、后が世界で最も美しい女性であると確信していた。それを証明するために、彼は気の進まぬ護衛のギュゲスに后が裸になったところを、彼女に知られることなく同意もないまま見るように強いた。ギュゲスは、主人 *despotes* に「己のもののみを見よ」という言葉を思い起こさせて抵抗した。しかし、カンダウレスはギュゲスに信ずるために見るのだと要求した。そして彼のためにちょっとした見世物を用意した。資料4に示されたとおりである。

〔資料4 カンダウレスがギュゲスのために用意した見世物（『歴史』1巻9

<sup>3</sup> W. R. Connor “Tribes, Festivals and Processions: Civic Ceremonial and Political Manipulation in Archaic Greece,” *Journal of Hellenic Studies* 107 (1987) 40-50.

章 2-3 節) ]

「わしはおまえをわしらの寝室に入れ、開け立てた扉の後ろに潜ませてやろう。わしが入った後から、後も寝室に来る。入り口の傍らに椅子があるが、後は身につけたものを一つ一つ脱いで、その上におく。それでおまえは十分にゆっくりと眺める(θεήσασθαι)ことができるわけだ。后が椅子を離れて寝台に向かって歩み、おまえに背を向けたならば、その時後の目にとまらぬよう気をつけて、扉の外に出るのだぞ。」

この見世物<sup>スペクタクル</sup>は、上演者にとっては不幸な結末となった。后はギュゲスが寝室から出て行くのを目にしたが、何も言わなかった。しかしながら翌日、彼女は武装させた護衛隊を背後において、ギュゲスと対峙した。彼女は、見てはならぬものを見たのだから、自害するか、それともカンダウレスを殺害して自分と結婚して王座を乗っ取るかどちらかを選べとギュゲスに言ったのである。ギュゲスは無理やり決断させられ、それによりカンダウレスと彼の王朝の終焉がもたらされることとなった。

このエピソードは、支配者が実際にできる以上に統制できると考えていたことを示している。テュランノス *tyrannos* (ヘロドトスが彼の称号として書き記している) でありデスポテス *despotes* (ギュゲスがそう呼びかけている) であるカンダウレスは、一人の人物には見ることを、もう一人には見られることを強いた。リュディアの文化ではきわめて恥ずべきこととされている状況であるにもかかわらず、ただ美しい妻をもったという幸運を見せびらかしたいがためにそうしたのである。

ギュゲスの玄孫にあたる、金持ちの王として有名なリュディアのテュランノス *tyrannos* クロイソスは、后ではなく自らの富をさらす見世物<sup>スペクタクル</sup>を用意した。理由は先のカンダウレスのそれと大して変わらなかっただろう。クロイソスは自分が最も幸運な男であることを知らしめたいと考えたのである。賢人であり、アテナイの立法家のソロンはあるときクロイソスを訪ねた。そのような訪問は年代的に言ってほとんどあり得ないのだが、ともかくヘロドトスはそう語っている。しかし史実かどうかよりも、ここでは物語の教訓が重要である。

数日にわたりソロンを歓待した後、クロイソスは彼の家来に命じて訪問客に宝物殿を見せようとした。家来たちはめぼしい財宝をすべて見せたが、そこで決定的瞬間がやってきた。資料 5 が示すとおりである。

[資料 5 クロイソスの富についてのソロンの見解 (『歴史』1 巻 30 章) ]

ソロンがそれらを見物し、心ゆくまで眺め終わった(θεησάμενον)頃を見計らい、クロイソスは彼にこう尋ねた。「アテナイの客人よ、そなたの噂はこの国へもよく届いている。そなたの賢者であることはもとより、知識を求めて広く世界を見物して廻られた(θεωρήεις)漫遊のことも聞き及んでおる。そこでぜひそなたにおたずねしたいと思ったのだが、そなたは誰かこの世界で一番

幸せな人間に遭われたかどうかじゃ。」クロイソスは自分が世界中で最も幸せな人間であるつもりでそう尋ねたのであったが、ソロンは王につゆへつらう様なことはなく、自分の真実と信ずるがままに答えていった。「王よ、アテナイのテロスがさような人物であろうと存じます。」

このテロスという人物は、ソロンが説明するには、裕福な市民で、すぐれた息子と孫に恵まれ、祖国のために戦って見事な戦死を遂げ、国費をもって埋葬され顕彰された。ソロンにとってはそれ以上の幸福な人生など想像できなかったのである。ソロンの見解によれば、莫大な財などは大したものではなかった。量より質というわけである。カンダウレスのように、クロイソスは他人がどのように見るかを計ろうとし、彼らの判断を指図しようとした。最も美しい女性、最も幸福な男、というわけである。しかしソロンにこの手はきかなかった。彼は、クロイソスがこれまでに会った世界で二番目に幸福な男だとすら考えなかったのである。

ヘロドトスは、クロイソスを訪ねたもう一人の著名なアテナイ人の物語についても記している。アルクマイオンは、ヘロドトスの時代のアテナイの政治においてもなお有力でありつづけていた裕福な名門の創設者であった。アルクマイオンの訪問についての話は、一族の「古くからの財」がどこに由来するかというおもしろくも不穏な物語である。アルクマイオンはクロイソスがデルフォイの神託に伺いを立てるのに手助けをしてやったことから、その礼としてサルデイスの王のもとに来るよう招かれた。彼が到着すると、クロイソスはアルクマイオンに宝物殿から持ち出せるだけの黄金を与えようと申し出た。資料 6 では、ヘロドトスは訪問者がこの機会をどう利用したかについて語っている。

#### [資料 6 アルクマイオンとクロイソス (『歴史』 6 巻 125 章) ]

アルクマイオンは次のような策を用いた。すなわちだぶだぶの着物を着て、深く懐をとり、できるだけ大きな長靴を履いて、・・・宝蔵に入ったのである。彼は砂金の山の中へ座り込むと、まず足と長靴の隙間に入るだけの金を詰め、ついで懐いっぱい金を満たし、髪の毛に砂金を撒きかけ、口にまでほおぼって、長靴をやっとの思いで引きずりながら宝殿から出てきたが、その姿はどうて人間とは見えなかった。口はいっぱいほおぼっており、体全体がふくれあがっていたのである。この姿を見てクロイソスは思わず笑ってしまったが、彼はアルクマイオンがとった金を全部与えたばかりか、それと劣らぬ引き出物をさらに贈ったのである。

クロイソスの宝物殿に関するこれらの二つの物語は、たがいに合わせ鏡のようなものである。いずれの場合にもリュディア王は彼のすばらしい富を見せびらかそうとした。しかし賢人ソロンは感銘を受けることはなかった。一方アルクマイオンは、クロイソスと「金が人を作る」という見解をともにした。ただし

ここでは彼自身がテュランノス *tyrannos* のために、人間には見えないおかしな見世物になるという犠牲をはらった。クロイソスの量的価値がアルクマイオンの金に対する貪欲さと同調しているだけではなく、威厳はさておいても富と権力におけるクロイソスの優越性が、アルクマイオンのできるだけ多く獲得しようとするふるまいによって明確にされているのである。アルクマイオンの訪問がテュランノス *tyrannos* の機嫌を良くさせたとしても何の不思議もない。

さて、『歴史』に登場する最も偉大な二人の王に話を移そう。ペルシア王ダレイオスと彼の息子のクセルクセスである。いずれも見世物の<sup>スペクタクル</sup>巧妙な操縦者であり、同時にその受け手でもあった。

ダレイオスは前 522 年から前 486 年までの間ペルシア王であり、所領を見ることを好み、永続的な記念碑によって彼の功績を世界に知らしめ記憶させることを望んだ。彼は帝國的侵略を好み、その中には黒海の北部に居住する遊牧民のスキュティア人に対する失敗におわった遠征も含まれる。スキュティアへの途上、ダレイオスは小高い見晴らしの良い地点に漕いでゆき、すばらしいポントス（黒海）とボスフォラス海峡の眺めを楽しんだ。θεάομαι（見る）という動詞にぶつからずに『歴史』のある一巻を通して読むこともできるが、ここ資料 7 では、同じ頁にこの動詞と同族の言葉が四回出現する。

[資料 7 ダレイオスの黒海眺望とその足跡（『歴史』4 巻 85 章、87 章）]

彼は岩の突端にすわって、見るに値する(ἀξιοθέητον)ポントス（黒海）を眺めわたした(ἐθηείτο)。実際この海は世界の海の中でも最も驚異に値する海で、・・・ダレイオスはポントスの眺望を楽しんだあと(ἐθεήσατο)、船で橋の架かっている地点にひきかえした。・・・ダレイオスはボスポロスの風景も鑑賞した後(θησαόμενος)、岸に白大理石製の二本の石柱を立て、一方にはアッシリア文字で、もう一方にはギリシア文字で、自分の率いる民族の名をことごとく刻ませた。当時彼は、彼の支配下にある民族のことごとくを麾下に従えていたのである。

ダレイオスはすばらしい眺望を賞賛すると同時に、彼の権力を宣言する二カ国語の碑文が刻まれた立派な記念碑を残した。その後まもなくボスポラス海峡をわたりヨーロッパに入ると、彼はさらなる壮大な碑文を建立することを命じ、資料 8 に見るような彼の帝国支配権を示すもう一つの荘厳な記念碑を建てた。

[資料 8 ダレイオスがスキュティア南部に足跡を残す（『歴史』4 巻 91-92 章）]

ダレイオスはこの川（テアロス川）に達して野営したが、この川が気に入ら、さらなる石柱をここに建てこれに次のような銘を刻ませた。「テアロス川の水源は、あらゆる河川にまさる最高最美の水を産す。スキュティア討伐

の軍を率いてこの源に達したるは、あらゆる人間にまさる最高最美の人、ペルシア国ならびに全大陸に王たる、ヒュスタスペスの息子ダレイオス」。このような碑銘がここに刻まれたのである。ダレイオスはこの地を発って、やがてオドリュソイの国を流れるアルテスコスという別の河岸に達した。この川に達したとき、ダレイオスは次のようなことをした。全軍の将兵にある場所を指定しておき、全員が通過する際に各自石を一個指定した場所に置くように命じたのである。全軍が命ぜられたことを果たしたとき、そこには石の大きな山がいくつも盛り上がったが、この石の山を後に、ダレイオスは軍を率いてこの地を去った。

ヘロドトスはここで壮大な眺望に対するダレイオスの親近感を強調している。彼はすばらしき海、海峡、川を眺めている。そして調査したすべての土地の支配者であることを実感させる見晴らしのきく地点を探す。実際、全世界の支配者というのはまさにダレイオスが目指していたものであった。このような光景スペクタクルを眺めるといことが、彼のスキュティア遠征と結びつけられているのは皮肉である。というのもその目的を達成することはかなわなかったからである。このような壮大な光景が彼に謙虚な賞賛の心を引き出すことはなかった。むしろ、それらはかえって王が尊大になるように仕向けたのである。ある意味、彼は自らを自然の光景スペクタクルになぞらえたのだと言えよう。自画自賛の碑文と大量に積まれた石は、それ自体が王の偉大さを証明する光景スペクタクルとなったのである。

だが、絶景スペクタクルを見物し、そうした壮大な場を自身の業績を記念する場となすべく心を砕き、景観を支配したにもかかわらず、ダレイオス自身が偽りの芝居にひっかかってしまったのである。彼はスキュティアを征服するという目的を達成できなかったものの、ヘレスポントスの北岸に位置するヨーロッパ側のトラキアの一部を征服に成功した。資料 9 にみるように、トラキア地方のパイオニアには、大王の関心を引こうとする二人の野心家の兄弟がいた。

[資料 9 僭主志願者がダレイオスに見世物を提供する(『歴史』5 巻 12 章)]

ここにパイオニア人でピグレス、マンテュエスという二人の兄弟があったが、この二人はダレイオスがアジアに帰った後、パイオニア人の独裁権を得たいという望みを持って、サルデイスにやってきた。その時二人は、背も高く器量も良い妹を一人、一緒に連れてきた。彼らはダレイオスが裁きをするために、リュディアの首都の城門の外に出御する頃を見計らって、次のようなことをした。二人の手に負える限り、妹を美しく着飾らせ、水を汲みに出したのである。女は水瓶を頭に乗せ、片腕では馬の手綱を引き、さらに手で麻糸を紡ぎながら水を汲みにいった。女がダレイオスの前を通り過ぎるとき、その姿が王の注意をひいた。女がこんなことをするのは、ペルシアやリュディアはおろか、アジアのどこの国でも見られないからである。王はその女に興味をひかれると、側近の二、三の者に、女が馬をどうするのか、よく見てく



るように命じた。使いの者たちは女の後についていったが、女は川へ着くと馬に水を飲ませ、飲ませ終わると水瓶に水を満たし、来たときと同じ道に戻っていった。先刻と同じように、水を頭へのせ、片腕で馬を引き、紡ぎ竿をまわしながら。

ダレイオスの偵察者がこの報告をもたらしたとき、彼はピグレスとマンテュエスにパイオニアのすべての女たちがそうするのかどうかと尋ねた。彼らは王にパイオニアを征服するよう仕向け、その結果自分たちがかの地の総督になることを期待して、その通りだと返答した。彼らがダレイオスのために用意した偽りの芝居<sup>スペクタクル</sup>はしかしながらうまくゆきすぎ、期待外れに終わることになった。芝居にほだされた王はパイオニア人を攻撃するよう命じ、彼らを祖国からアジアの王国内に強制的に移住させた。僭主になることを夢見ていた二名のその後の運命については何も語られていない。

数年後、多数の東方のギリシア諸市がペルシアの支配に反旗を翻し、失敗に帰した。ダレイオスは反乱を鎮圧し、ついにはギリシア本土に遠征してイオニア人を援助するために援軍を送ったアテナイを罰しようとした。この侵攻は見ものであったが、それは大王が操作するものではなかった。遠征は前 490 年にアテナイ近郊のマラトンの戦いで壊滅的な結末を迎えた。ギリシア軍は予想に反してペルシア軍を敗走させ一掃したのである。

ダレイオス自身は現場にいなかったが、戦死した兵と敗退した兵士は戦場にのこされた。スパルタ人、すなわちラケダイモニオン人は最強のギリシア兵であったが、戦闘前にアテナイを援助することはできなかった。祭りの最中であった彼らは、満月が過ぎるまで遠征に出ることができなかったからである。資料 10 は、数日後、彼らがマラトンに到着したときの状況について語っている。

**[資料 10 マラトンの戦いに敗れたペルシア兵を見るスパルタ人（『歴史』6 巻 120 章）]**

スパルタ兵二千が満月の後アテナイに到着した。戦闘に遅れまいと必死の強行軍をつづけたので、スパルタを発って三日目にはアッティカの土を踏んだのである。合戦には間に合わなかったが、ペルシア人の姿を見たい(θεήσασθαι)という願望に駆られ、マラトンに赴いてそれを見た(ἐθεήσαντο)。そうして後アテナイ人の勇気とその武功をたたえて帰国していったのである。

ここでダレイオスの自慢の軍隊はギリシア人に見つめられる受け身の客体となっている。ゆっくりと彼らを眺めることのできるのはギリシア人であって、立場が逆転したことを示唆している。カンダウレスと彼の美しい妻の物語に示されたように、自分の意志で人を見つめることのできるということはその人物を支配しているということを示している。偉大な「見物人」たるダレイオス麾下の軍隊は、敵に見つめられるままなすすべもなく横たわっていた。

数年後、クセルクセスがダレイオスの後継者となった。彼はアテナイを罰し、ギリシア中を帝国の支配下におきたいという父の欲求を引き継ぐとともに、世界を舞<sup>スペクタクル</sup>台とするのがふさわしいという性向も引き継いだ。見るという動詞  $\theta\epsilon\acute{\alpha}\omicron\mu\alpha\iota$  とその関連語は、『歴史』の中で他のどの登場人物よりもクセルクセスに関連して頻繁に用いられている。

前 480 年、クセルクセスは自ら大軍を率いてギリシアにやってきた。ヘロドトスはこの長旅について詳細に記載している。ペルシア軍はリュディアのサルデイスを通してヘレスポントスにいたり、ヘレスポントスに橋を架けて渡り、陸路海路からギリシア諸市にむかった。クセルクセスは、アビュドス、ドリスコス、テルモピュライ、サラミスの各地で自らを観客とした。アビュドスに到着したとき、クセルクセスは自身の軍隊の検閲をおこなっている。

#### [資料 11 クセルクセスの閲兵（『歴史』7巻 44-45 章）]

軍勢がアビュドスに着くと、クセルクセスは全軍の閲兵をしようという気をおこした。小高い丘の上に、かねて王の命を受けていたアビュドス人の手によって白大理石の展望台がわざわざ王のためにしつらえてあったので、王がここに座って海浜を見下ろすと、陸上部隊と艦隊とを一望におさめることができた ( $\acute{\epsilon}\theta\eta\epsilon\acute{\iota}\tau\omicron$ )。この光景を眺めているうちに ( $\theta\eta\epsilon\acute{\upsilon}\mu\epsilon\nu\omicron\varsigma$ )、王は突然船の漕ぎ比べをさせてみたくなった。漕ぎ比べがおこなわれて、フェニキアのシドン人の船が優勝したが、王はこの競技と全軍の威容を眺めて満悦であった。

デイヴィッド・コンスタンはその啓蒙的な論文の中で、この不可思議な反応について説明している<sup>4</sup>。クセルクセス、あるいはペルシア人は総じて、質ではなく、何人とかどれほど長生きできるかといった量で物事を量ったのだと。私は、ここでクセルクセスはトロイア戦役を見下ろしていたゼウスやアポロンやアテナのような神の地位をも獲得していたのだらうと付言したい。オリンピアの神々とは違って、しかしながら王は死すべきものの限界を超えることはできなかった。これについて、王は資料 11 につづく資料 12 でじかに答えている。

#### [資料 12 クセルクセスの反応（『歴史』7巻 45-46 章）]

クセルクセスはヘレスポントスの海面が艦船によって覆い尽くされ、海岸という海岸、アビュドスの平地のことごとく充ち満ちている様を眺め、我が身の幸せを自ら祝福したのであったが、やがて落涙した。これに気づいた叔父のアルタバノスが・・・クセルクセスの落涙したのを見て王に訊ねているには、「王よ、ただいまのお振る舞いは、つい少し前のご様子とは、何とま

<sup>4</sup> D. Konstan “Persuasion, Greeks and Empire,” in D. Boedeker ed. *Herodotus and the Invention of History* (Arethusa 20) 1987, 59-73, p.64.

たかけはなれておりますことか。いましがたご自分の幸せを寿いでおいでかと思えば、今は涙を流しておいでなさる。」するとクセルクセスが言うには、「これだけの数の人間がおるのに、誰一人として百歳の齢まで生き永らえることができぬと思うと、おしなべて人の命はなんとはいかないものかと、わしはつくづくと哀れを催してきたのじゃ。」

トラキア地方のドリスコスに到着したとき、クセルクセスは自身の軍隊をさらによく見たいと思った。これについては『歴史』7巻 60-80章に長々と描写されているが、ここでは引用しない。彼は大きな円陣のなかに一度に一万人の兵を詰め込むことで軍勢の数をはかろうとした（ヘロドトスは軍勢の数は170万人に上ったと書いているが、これは誇張である）。ヘロドトスのテキストで6、7頁にもおよぼクセルクセスは事細かに閲兵してまわった。その民族衣装の描写からも明らかなように、支配民族の多様性に注意がむけられた。クセルクセスはこのようにして支配権を主張し、文字通り囚われの光景<sup>スペクタクル</sup>の中に引き入れることで兵士にもそのことを理解させたのである。

兵士たちはその少し前、すなわちクセルクセスがヘレスポントスに橋を架けたときにも囚われ人として描かれた。ヘロドトス的な描写で言えば、ヨーロッパとアジアがつながれる橋を架けたときのことである。資料13にあるように、王は配下の者たちがむちで駆り立てられて橋を渡るのを眺めていた。

#### 〔資料13 クセルクセス軍が橋を渡る（『歴史』7巻56章）〕

クセルクセスはヨーロッパに渡ると、軍勢がむち打たれながら海を渡る有様を眺めていた(ἐθῆεῖτο)。遠征軍は寸時も休まず七日七晩にわたって海を越えた。

王が観客となった場をもう二箇所あげておこう。いずれもギリシア本土の地である。ペルシア軍が有名な300人のスパルタ精鋭部隊を打ち破った伝説のテルモピュライの戦い、そしてペルシア軍が海戦で決定的敗北を喫したサラミスの戦いでは、戦いそのものが王の見世物<sup>スペクタクル</sup>となった。

テルモピュライでは、クセルクセスは彼の軍隊とギリシア軍の間で繰り広げられた戦いの初期の段階を、試合に興奮する観客であるかのように見物した。資料14が示すとおりである。

#### 〔資料14 テルモピュライの観客クセルクセス（『歴史』7巻212章）〕

この攻撃の最中、観戦していた(θηεόμενον)ペルシア王は、自軍を気遣うあまり座っていた椅子から三度も飛び上がったと伝えられる。

300人のスパルタ軍が、他国の同盟軍とともに遂に命を落とすと、クセルクセスは戦争の結末の光景を操ろうとした。彼はギリシア軍の屍体を公然とさらし

た。一方ペルシア軍の戦死者については資料 15 のごとくした。

**[資料 15 クセルクセスが死者の光景をつくる（『歴史』8巻 24-25章）]**

遺体の処理は次のようにした。テルモピュライにおける自軍の戦死者の遺体は、実に二万にのぼったが、その一千だけを残し、残余は壕を掘って埋め、その上に土を盛り上げ木の葉をかけて、水軍の将士の目につかぬようにした。伝令使は海を渡ってヒスティアエアに着くと、全軍の将士を集めて次のように伝えた。「戦友諸君よ、クセルクセス王の思し召しにより、希望者は一時その持ち場を離れ、王の御軍勢に勝とうなどと思いがったおろか者どもを相手に、王がいかに戦われたかを見学しても(θεήσασθαι)よろしいとのことである。」この布告があった後、・・・見学(θεήσασθαι)希望者は多数に上った。海を渡った一同は死骸を見てまわった(έθηεύντο)。・・・もつとも海を渡って見学に来た者たちも、クセルクセスが自軍の戦死者の遺体に施した細工に気づかなかつたわけではない。実際それは一見して滑稽な話で、ペルシア軍の一千の死骸は目に付くように横たわっているのに、ギリシア兵の四千の遺体はすべて一箇所に集められてあつたのである。

王がアビュドスで配下の軍勢に船の漕ぎ比べをさせたことはすでに見たとおりである(資料 11)。一方アテナイ沖のサラミスでの海戦では、クセルクセスは浜に据えた玉座から現実の海戦を眺め(『歴史』8巻 69、86章)、彼の書記はそれぞれの軍船がいかによく戦っているかを記録していた。しかしダレイオスが働き者のパイオニア人の女性を見て騙されたように、またアテナイ人が女神アテナとともに馬車に乗っているペイストラトスを見て騙されたように、クセルクセスもまた第三者の舞台の観客となったときに騙されたのである。

彼は自軍の指揮官の一人、ヘロドトスの祖国である小アジア沿岸の町ハリカルナソスの僭主の未亡人である、ギリシア人アルテミシアに欺かれることになった。彼女の夫が死去したとき、アルテミシアは僭主の地位を引き継ぎ、自ら進んでクセルクセスのために戦地に赴いた。この類例のない僭主は、自らが見世物スペクタクルの主人であることを示した。サラミスの海戦の最中の緊張の瞬間における彼女の機転は資料 16 に要約されている。

**[資料 16 クセルクセスがアルテミシアの演出を見る(『歴史』8巻 87-88章)]**

アルテミシアの乗った船はアテナイの船の追撃を受けていた。前方には友軍の船があつたけれども、アルテミシアの船は・・・敵船の追跡を逃れることができなかつた。遂に意を決して次のような措置をとることとし、決行した結果は見事にそれが成功したのである。すなわち・・・彼女は友軍の船に激しく突入していった。・・・アテナイの船の艦長は、その船がペルシア軍の船に突入するのを見て、アルテミシアの船をギリシア船であるか、あるいはペルシア軍からの脱走船で、味方の応援に来たものと思い、方向を転じて

他の艦船に向かったのである。つまりアルテミシアは敵の手を逃れて破滅を免れることができ、さらに悪事（κακόν）を犯しながらそのためにかえってクセルクセスに対して大いに面目を施すことになった。すなわち観戦していた（*θηεούμενον*）王はその船が突入したのを認めたが、そのとき側近にいた者の一人が、「殿、ご覧でございますか。アルテミシアの何というあっぱれな戦いぶり、それに敵船を見事に撃沈いたしました。」と言ったという。それが本当にアルテミシアの手柄であるのか、というクセルクセスの問いに対して一同は、アルテミシアの船の標識をよく知っているのものでそれに間違いはない、そして破壊された船は確かに敵船であったと答えた。

ヘロドトスは観客たる王がみずから目にしたことを誤解したということ強調している。ペルシア王に服属する僭主であり、ずばりギリシア人であり女性であるアルテミシアは、彼らが自分のすることを見ればどう解釈するかを考えた機転の利いた行動によってアテナイ人の艦長も同盟者であるペルシア王をも欺いたのである。

アルテミシアがおこなったことは、上記にあるように悪事（κακόν）と書かれている。しかしながら今一人のギリシア人の女僭主は『歴史』全体を通じて最も残虐な事件に関与していた。

北アフリカのギリシア都市キュレネ（現リビア）の悪名高きフェレティメもまた僭主の未亡人であったが、息子のアルケシラオスが近隣の町バルカの人々の蜂起によって殺害されるとみずからがキュレネの支配者となった。

息子殺害の復讐のためにフェレティメはペルシア人のエジプト総督アリュアンデスに大軍を出してくれるよう説得した。バルカを包囲し、ペルシア人司令官の作戦が成功すると、町は征服され、フェレティメは復讐を遂げる（資料 17）。

#### [資料 17 フェレティメのおぞましい舞台（『歴史』4巻 202章）]

ペルシア軍からバルカ人の首謀者たちを引き渡されたフェレティメは、彼らを城壁の周りで磔刑に処し、彼らの妻の乳房を切り取り、これをも城壁に貼り付けさせた。

θεάομαι という語はここでは使われていない。しかしフェレティメが敵に身の毛もよだつような見せしめ<sup>スペクタクル</sup>をもたらしたことは疑いないだろう。彼女は処罰するだけでは飽き足らず、あざ笑ひ品位を貶めるべくさらしものにしたのである。彼女に戦いを挑んだ男たちは町の城壁に貼りつけられた。本来人の目に触れるものではないバルカの女性たちの乳房も同様に展示され、控えめな女性性と母性がねじ曲げられたのである。

ヘロドトスの取り上げた最後の事件は、フェレティメの恐るべき残虐な復讐とも共通点がある。ここでも処罰の視覚的影響が強調されている。クセルクセ

ス軍がギリシア本土から追われた後、アテナイはヘレスポントスのヨーロッパ側の大陸に位置するペルシア軍の要塞セストスの攻撃に向かった。ここを統治していたペルシア人のアルタウクテスは、この地域のギリシア人に対して極悪非道の限りを尽くしており、この地域の英雄神プロテシラオスを侮辱すらしていた。アテナイ人はセストスの町を占領し、アルタウクテスと息子は逃亡中にとらえられた。遠征の指揮をとっていたアテナイ人の将軍クサンティッポス（ペリクレスの父）は住民の圧力に屈し、資料 18 にあるように、アルタウクテスを公開処刑するお膳立てをした。

〔資料 18 クサンティッポスの手配したアルタウクテスの舞台（『歴史』9 巻 120 章）〕

彼らはアルタウクテスを、クセルクセスが海峡に架けた橋のある・・・岬にひいていき、板に釘付けにして高くつるした。またその息子はアルタウクテスの目の前で石打ちの刑に処した。

『歴史』の末部においては、独裁的に振る舞うのは王や僭主たちではなくアテナイ人であった。彼らは目立つ場所で時間をかけて敵を殺害し、その息子の処刑を見せつけた。残酷な公開イベントは、いまやクセルクセス軍に対して攻撃を仕掛けているギリシア人にとっては不吉な前兆となった。今やアテナイが僭主の列に加わるのか。ヘロドトスがこうした逸話を同時代の聴衆に対する警告として使っていたことは、とりわけクルト・ラーフラウプが論じてきたように大いに考えられることである<sup>5</sup>。ヘロドトスの時代のアテナイは、他のギリシア諸市に対する過酷な支配を強めていったがために「ポリス・テュランノス（僭主たるポリス）」と呼ばれることもあった。ペルシアに対する防衛同盟としてはじまった同盟は、紛れもないアテナイ帝国へと変質していた。

最後に個々の逸話からは離れて、なぜ著述の達人であるヘロドトスが「スペクタクル」という主題を頻繁につかって独裁者を描写したのかについて考察したいと思う。ここで三つの見方に焦点をあてたい。第一に、支配者が自分自身が眺めるために作り上げる見世物。ダレイオスがスキュティアを眺めたり、クセルクセスが自身の大軍を眺めるのがこれにあたるが、このスペクタクルは、人間が神の地位に自らをなぞらえ、世界を自身の管轄下にあるものとみなすことになるのである。このことがホメロスの『イリアス』において時折トロイア戦争を眺めるオリンポスの神々を思い起こさせるということは上述のとおりである。僭主は観客であり、世界や配下の人間を自身の娯楽や審判の対象として、あるいは制御感を確認する対象として利用するのである。ヘロドトスのギリシア人聴衆にとって、人間がそのようにふるまうことは危険で傲慢なことにほか

<sup>5</sup> K. Raaflaub “Herodotus, Political Thought, and the Meaning of History,” in D. Boedeker, *Herodotus and the Invention of History (Arethusa 20)* 1987, 221-248.

ならなかった。

第二に、僭主が他者のために見世物<sup>スペクタクル</sup>を準備すること。僭主は彼らが現実をどのように認識しているかをはかろうとする。クロイソスが自らの幸せの証左であるかのように富をソロンに見せびらかす逸話（資料 5）がこれにあたる。ヘロドトスはこうした「架空の」<sup>スペクタクル</sup>見世物はときに失敗に終わったと記している。賢いと思われていたアテナイ人は、フェエを女神アテナに見立てたペイシストラトスの馬鹿げた茶番にひっかけられた（資料 3）。一方テルモピュライでペルシア軍の遺体を隠そうとしたクセルクセスの試み（資料 15）にはだれも引っかからなかった。敵を第三者に対する見世物<sup>スペクタクル</sup>として利用することは、フェレティメやクサンティッポスの例に見られるように（資料 17、18）、敗北した敵を下劣で救いようのない見世物としてさらすことで、独裁者の残酷さをもっとも醜く示すことになった。

第三に、第三者<sup>スペクタクル</sup>が僭主の認識や権力をたくみに操作する見世物を演出しようということ。クセルクセスがサラミスの海戦でアルテミシアに騙されたり（資料 16）、ダレイオスがパイオニア人の兄弟に騙されたりしたように（資料 9）、支配者が単純にもこのような見世物に引っかかる可能性もあった。概して、彼が眺めれば支配下におけるという信念や、他人がどう見るかを決定しているのは自分であるという信念（誤っていようとも）が、僭主の性格を規定することになった。明言を避けているものの、ヘロドトスの話術という織物の中にこのことは詩的に織り込まれているのである。

最後に歴史家自身はどうだったのかを問うこととしよう。彼は選択的に自身の話術の枠組みを作ることによって、聴衆に過去を「類推」させている。彼はわざわざ見たことがらについて誇っているが、その際 ὀράω/ εἶδον という動詞を用いている。資料 19 で二つだけ事例を見ておこう。

#### [資料 19 観客ヘロドトス？]

私はエレファンティネの町に行って自分で見た(αὐτόπτης)（『歴史』2 巻 29 章）。

私がアラビアのこの地に行ったのは、空飛ぶ蛇について学ぶためであった。そこに到着したとき、私は数え切れないほどの蛇の骨と背骨を目にした(εἶδον)（『歴史』2 巻 75 章）。

歴史家ヘロドトスは先ず何より世界を見る者であった。しかし彼の見方は僭主のそれとは異なっていた。自身の行動を示すのに、彼が動詞 θεάομαι を一度も使っていないということは重要である。彼は自身を好奇心の強い注意深い観察者であるとは描いたが、尊大な「観客」、または自分勝手に<sup>スペクタクル</sup>光景を作り出すような者としては描かなかった。後者は僭主の領分なのである。